

「研究助成」のこと

佐藤修二

2001 年以來毎年一回、これまでに 6 回の研究助成セミナーが実施されてきました。この企画が始まる二年前（1999 年）、当時の忍足会長が提案された「研究助成策検討委員会」に関わった者の一人として、この間の研究助成策決定の過程とその後の経過について、（感想を含めて）述べさせていただきます。

忍足提案のきっかけは、その前年、山口県立大学で開催された評議員会で、池上忠弘元会長が「学会賞」創設（賞には学会基金の一部を充てる）を提案されたことでした。評議員からは、学会基金を取り崩して使うのであればもっと他にも優先させるべき事があるのではないかと、など様々な意見が出されました。評議員会で結論に至るのは困難と判断された忍足会長の提案で、「研究助成策検討委員会」が組織され、「池上前会長提案の「学会賞」とそれへの対案、（1）出版や研究の助成、（2）若手研究者育成のための講演会や合宿の開催、（3）松浪奨励賞創設の際に提起された諸案の再検討、（4）学生会員や常勤職を持たない会員へのトラベル・グラントの支給」を審議することになりました。（なお、この委員会は上記以外の可能な助成策の検討、複数の助成策の決定なども委ねられておりました。）委員には、池上恵子、奥田宏子、向井 毅、下笠徳次の四先生と、私が任命されました。

1999 年夏から翌 2000 年 12 月はじめにかけて、私達委員は会合の他に手紙やメールのやりとりを重ね、最終段階では、当時の小川 浩副会長と山内一芳事務局長にも会議に同席いただいて、中間報告（1999 年）と最終報告（2000 年）をまとめました。中間報告では「学会賞」やトラベル・グラントを直ちに実施することには問題があることを指摘しました。最終報告では、早急に実施すべき助成策として、特に若手研究者の育成を目指す講演会やシンポジウムの実施を提案し、具体的な企画、そのための予算などの検討結果も報告しました。（「学会発表奨励金」は 2000 年度からすでに実施しておりました。）「研究助成策検討委員会」は、新たに設けられた「研究助成委員会」の発足（2001 年）をもって、その任務を終了しましたが、この「研究助成委員会」は「研究助成策の検討」と「具体的助成策の実施」とに責任を持つ常設の機関として提案されたものです。特に、他の団体・個人の主催する様々な企画との調和をはかりつつ、効果的な助成策を実施することが期待されていました。

評議員会への報告でも指摘しましたが、当学会にとって「研究助成」は最も基本的な活動の一つであり、現在のような厳しい時代にあってはその重要性はますます大きいと思います。しかし、研究助成の活動には財政の裏付けがなければなりません。具体的助成策の実施に際しては人手も必要です。この間明らかになった財政問題を見ても、学会主催の企画としては、当面、若手研究者育成に重点を置かざるを得ないものと思います。「報告」で指摘したように、支出削減の努力とともに、公的資金の獲得や、積極的な寄付集めの努力も必要と考えます。

「研究助成委員会」発足からのこの 6 年間、毎年一回セミナーが開催されました。(2001 年、Professor David Dumville, Professor Patrick O'Neill による 'An introduction to Old English palaeography' (関西大学)、2002 年、中尾祐治、向井 毅両先生の「刊本研究」(鳴門教育大学)、2003 年、池上昌、渡辺秀樹両先生の「古典の精読」(福岡女子大学)、2004 年、松田隆美、家入葉子両先生の「英国の大学院教育について」(同志社大学)、2005 年、小川 浩、奥田宏子両先生の「中世英語英文学における最近の研究について：古英語統語論・中世演劇の場合」(青山学院大学)、2006 年、松本博之先生の「写本を読む」(京都産業大学)。最近の 2 回は残念ながら参加できませんでした。) 私は第一回から四回まで参加させていただきましたが、いろいろな意味で非常に勉強になりました。この企画の良い点は、若手研究者だけではなく、誰でも参加できるということです。いろいろな人が集まって交流する事による効果ははかりしれません。講師の先生方、「研究助成委員会」の先生方、一緒に参加された方々に感謝致しております。今後このような企画が長く続くことを祈ります。

最後に、「研究助成」には会員の研究活動奨励と支援、研究成果公表に対する助成など若手研究者育成以外にもいろいろなことが含まれます。1999 年「研究助成策検討委員会」が求められたのは、これら全てのことを念頭に置いて審議し、必要な助成策を決定することでした。同委員会は最終報告で、当面早急を実施すべき助成策として、若手研究者育成のためのセミナー等を決め、そのほかの助成策の検討、実施については、「研究助成委員会」に引き継ぐことを提案しました。その後の経過を見ると、「研究助成委員会」の役割は、現行の助成策の具体的企画の決定とその実施に限定されているようにも思われます。昨年度の評議員会で「学会賞」の論議が繰り返されるのを見て、1999 年の「研究助成策検討委員会」の事が思い起こされました。